



謹賀新年



新年、明けましておめでとうございます。まあ、いろいろありますが、とりあえずはめでたい^^;。「100年に一度」と言う厳しい状況ではありますが、明るく胸を張って堂々といきましょう。この NewsLetter も気がつけば 37 号目。継続は力なり、と言いますが、正直しんどい^^;。テーマを決めるのに一苦労、テーマが決まってからは関連図書やサイトを見まくり、何とかかんとかお届けしているわけです。ただ、今回のテーマはすんなり決まりました。



「建築家安藤忠雄」

きっかけは昨年 12 月に六本木ヒルズ・アカデミー・ライブラリーで聞いた講演でした。それまではなんとなく偉い建築家くらいの認識しかありませんでした。その日のテーマも「組織の条件、リーダーの条件」という、およそ「建築家」とは結びつかないものでした。最近ではセミナーや講演会を聞く時は出来るだけ正面、最前列で聞くようにしています。講演者の声を「ナマ」で聞ける距離だと、入ってくる情報量が違ふと感じます。スライドを使いながら語られた内容は、「組織の条件、リーダーの条件」と言うテーマに添ったものでしたが、およそ二時間のセッションで語られたのは「安藤忠雄」と言う建築家の生き様そのものでした。久しぶりに深い感銘を受けました。今日はその生き様を通じて、これからの日本が、日本人がどのように生きるべきなのか、を考えてみたいと思います。



←こんなに人相は悪くないです(笑) photo by アラーキー

一冊の本があります。2008年10月に上梓された、「建築家 安藤忠雄」(新潮社) 税別 1900 円。安藤の初めての自伝です。そもそも、安藤忠雄とはどんな人物なのか、

1941年、大阪生まれ。近所の大工の仕事を手伝ううちに「建築」に目覚める。工業高校を卒業後、世界各国を回る旅をした後、独学で建築を学び、自分の建築研究所を創立。10年近く食べるのにやっとという雌伏の時を過ごした後、「コンクリートの打ちっぱなし」と「光と影」という独特の哲学をもとに、次々と斬新な建築を手がける。活躍の舞台は民家、商業施設、公共施設、教会など幅広い。1997年から東京大学教授、2003年名誉教授。現在は2016年東京オリンピック招致委員会の中心で活躍をする。

決して恵まれた環境で生まれ、育ったわけではない。大学の建築学部すら出ていない。工業高校を卒業後は自分がやりたいことを見つけるために定職につかなかった。ただ見様見真似で建築の本を読みまくり、時には大学の授業にも潜り込んでいたらしい。二回目の海外旅行でアメリカの桁外れな「豊かさ」を目の当たりにする。国土も資源も生活習慣も違う日本が、アメリカの真似をするむなしさを思った。もっと身の丈にあった生活、狭いなら狭いなり豊かさを考えるべきではないか。ここが「建築家 安藤忠雄」の出発点となった。

開口部が本当にこの入り口だけです→



やがて、一戸の民家の設計を任される。今も大阪にある「民家」の設計を行う。



←中庭を作る事で外観からは想像もつかない採光空間

「住吉の長屋」である。間口二間、両隣と壁一枚で隔たれた設計・建築としては非常に難しい立地であった。そこに外見から見れば入り口だけが唯一の窓である、コンクリートの打ちっぱなしの家を設計・施工した。まるでお墓である。しかし、内部に入ると光があふれた中庭を中心とした家の空間が出現する。

「問題はこの場所で生活を営むのに本当に必要なものは何なのか、一体「住まう」とはどういうものなのかと言う思想の問題だった。それに対し私は自然の一部としてある生活こそが住まいの本質なのだという答えを出した」。建築とはその時代を映し、未来を予感させる何かが必要なのだ。

また、「住まうとは、ときに厳しいものだ。私に設計を頼んだ以上、あなたも闘って住みこなす覚悟をしてほしい」、聞きようによっては傲慢であるが、妥協を許さない安藤の姿勢が見える。

次第に、大きな商業施設や公共施設の設計の仕事の依頼が入ってくるようになる。

「その場所に、その時代にしか出来ない建築。重要なのは、建築の背後にある意思の強さだ」また「都市に立つ建築がいかにあるべきか、建築は都市に何ができるのか——自分自身ずっと考えてきた“建築の責任”が強く問われる仕事であると思ったからだ」

ご存知、表参道ヒルズ、ちょっと不思議な空間です→

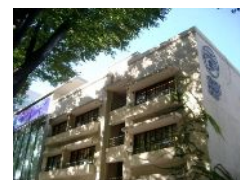


こうした考え方の集大成が、「表参道ヒルズ」である。

表参道ヒルズは珍しく高層ビルではない。周囲にあるケヤキ並木よりも背が低くなるように設計されている。安藤が考える「建築が考える都市に何ができるか」を徹底的に追及したからである。しかし、商業

ビルである以上、建蔽率を使いきらない建築は、事業の採算性に直結する問題であり、しかもその土地にあった「アパート」2棟をそのまま残そうと言う提案は普通の建築家には出来ない発想である。猛反対を受けながら、じっくり、ゆっくり説明を続ける。なんと、最終的な合意に至るまで4年の歳月がかかった。ケヤキの高さを超えない建築は、地下空間を存分に使うことにより、採算性の問題をクリアした。もとも

本当に作ってしまったそうです。過去と未来をつなぐ導線→



とあったアパートを残す、というプランは、新しくアパート一棟を「復元 新築」することで落ち着いた。本人が「のらりくらり」という「交渉の達人」でもある。

安藤は気が長い（笑）。自分がこうだと思ったものに関しては妥協をせずに、何回でも説得をする。そのうちに、安藤の考え方や哲学に共鳴するようになる。結果として、ほぼ当初の狙い通りのプランを通す。どこまでも「ぶれない」。



六甲では集合住宅（マンション）を手がける。ここでのテーマは「集合住宅ならではのパブリック空間をどれだけ意味のあるものにできるか」である。施主からしてみればパブリックな空間は無駄であり、利益確保の「敵」でさえある。しかしここでも「その建築が何のために作られるのか」を突き詰めていく先には「何のための集合住宅か」という根源の問いが残る。日本人の特質として、異常なまでの持ち家志向がある。その日本人が土地の所有権は共有者間で按分された集合住宅に住むのは、経済的な理由以外にない。しかし例えば古い長屋の並ぶ街区の濃密な路地空間の温もりと、都市郊外の無味乾燥な分譲住宅の立ち並ぶ光景と、どちらが豊かかといえ、答えは明らかだ、という。

さらに進化を続ける安藤の元には公共機関からのオファーが舞いこむようになる。1969年に事務所を開設してから20年の月日が流れている。ここでも、行政サイドとの軋轢が絶えない。「前例がない」「あまりにラディカル」。新しい建築に向かうときにいつも意識するのは「その建築が何のために作られるのか」と言う原点、原理に立ち返って考えることだ」とする安藤は折れない。

香川県の小島、直島に理想を見出そうとしている。施主はベネッセ・コーポレーションの福武会長である。「直島に子供のためのキャンプ場を作る、その監修をしてほしい」がスタート。そこに宿泊施設を建て

た。<http://www.naoshima-is.co.jp/> 続いて美術館、



さらには民家の改修も。

人口 3500 人の村に**年間 20 万人が訪れる**。現在では島民が「直島」を魅力的な島にするべく、様々



←島民の家がオブジェに変わっているそうです。

な活動をしている。

現在、安藤が手がけている仕事は、「2016 年東京オリンピック」誘致活動である。安藤は別にオリンピックに興味があるわけではない。オリンピックと言う舞台を通して、「東京」と言う街を世界に発信したい、と考えている。「**緑と自然の豊かな街**」「**公共交通だけで移動できる街**」「**ゴミの島→海の森**」へ。

これがメインのスタジアムです→



<http://www.uminomori.metro.tokyo.jp/>

国土も狭く、資源もない日本が頼れるのは「文化力」しかない。問題はその日本的感性が今日の日本社会から失われつつあることであるという。だが、そのスピリットが失われていないのは、神戸の震災と、復興に至るプロセスで立証された。自然による独自の文化的土壌のもと、有事には驚くべきたくましさ發揮する人々の心の強さ。自然をも再生する雄大な構想力。それは世界に誇れる日本人の優れた個性だ。日

神戸復興のシンボルです→



本人もまだまだ捨てたものではない。と、説く。

講演ではリーダーの条件として

好奇心、元気である事（楽観的であること）、ぶれないこと、思いを一つにする事、メンバーとの対話、考え抜くと言う姿勢、行動力、等をあげる。

大切なのは、「その建築を使う人間への気使いができていないか、定められた約束を守り遂行できているか」をきちんとチェックする事。「いつでもどこでも私と対峙し攻撃を受け止められるよう臨戦体制を整えておく。その緊張感の中でスタッフは仕事を覚えていった。勘がいい青年なら、2年も経てば、十分仕事を任せられるようになっていく。そうして、経験が浅い若者に仕事の機会を与えていき、失敗したら“俺が責任をとる”という覚悟でこちらが臨めば若者はどんどん成長するのだ」。

また、「現実の社会で、本気で理想を追い求めようとするれば、必ず社会と衝突する。大抵、自分の思う通りにいかず、連戦連敗の日々を送る事になるだろう。それでも、挑戦し続けるのが、建築家と言う生き方だ。あきらめずに、精一杯走り続けていけば、いつかきっと光が見えてくる。その可能性を信じる心の強さ、忍耐力こそが建築家にはもっとも必要な資質だ。」安藤の生き方そのものである。

「独学で建築家になったという私の経歴を聞いて、華やかなサクセスストーリーを期待する人がいるが、それは全くの誤解である。閉鎖的、保守的な日本の社会の中で、なんの後ろ盾もなく、独り建築家を目指したのだから、順風満帆に事が運ぶわけがない。とにかく最初から思うようにいかないことばかり、何を仕掛けても、大抵は失敗に終わった。それでも残りのわずかな可能性にかけて、ひたすら影の中を歩き、一つ掴まえたなら、またその次を目指して歩き出し——そうして小さな希望の光をつないで、必死に生きた人生だった。いつも逆境の中にいて、それをいかに乗り越えていくか、と言うところに活路を見出してきた。だから、仮に私のキャリアの中に何かを見つけるとしても、それは優れた芸術的な資質といったものではない。あるとすれば、それは厳しい現実と直面しても、決してあきらめずに強か（したたか）に生き抜こうとする、生来のしぶとさなのだと思う。」

現在の底が見えない、経済状況の中で、少しでも元気に、絶望せずに生きていける、そんな思いを安藤忠雄氏の言葉の中に感じました。今回の NewsLetter ではぜひともこうした、言葉を皆さんにもお分けしたく新春のテーマとしました。確かに客観的な情勢は厳しい。でも、ただ「厳しい」と嘆くのではなく、闇の中にあり、しかし一本の光を求めて、活路を探す。そんな安藤氏の生き方を今こそ学ぶ必要を感じました。六本木ヒルズ・ライブラリー会員になってよかった^^;。しかし安藤氏を講師に無料の講演会をセッティングしていただける、森ビルの森社長の太っ腹にも感心しきりです。これぞ文化活動！

閲読お疲れ様でした。ま、そうは言ってもお仕事は必要ですので^^、皆様からのご発注を闇の中で待っております（笑）。新しい年が皆様にとっても素晴らしい年となるように、共に頑張りましょう。本年もよろしくお祈りしますm(_ _)m。次回は、1月末。世界経済はどうなっているのか・・・。

株式会社アール・リサーチ 〒271-0051 千葉県松戸市馬橋 1896-1 ヴィレッジ K・I 馬橋 3 F

Tel 047-342-3181 mobile 090-7428-8999 mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp

<http://r-research.co.jp/> ブログ、ほぼ、毎日更新しています→<http://rresearch.blog103.fc2.com/>